

**地域の経済界とともに構築する  
福井型キャリア教育の提言**

- 経済界との継続的な交流により若手教員の資質向上を図り、担い手づくりを推進するシステム
- 産高大が連携した、県下に広めるべき課題解決型キャリア教育の推進モデル

**2019年5月**

**福井経済同友会**

**人づくり委員会**

## 目 次

	ページ
I. はじめに	1
II. 若手教員と経済界との交流会の活動報告並びに継続・発展 に関する提言	3
1. 交流会の結成	3
2. 若大海と命名	3
3. 若大海の活動概要	3
4. 初年度の若大海を終えて	4
5. アンケート結果	5
6. 経済界と継続的な交流により若手教員の資質向上を図り、 担い手づくりを推進するシステム提言	5
(1) 目的	5
(2) 継続・発展に向けたシステム	6
(3) 課題と具体策	7
III. 課題解決型キャリア教育の研究報告と県下に広めるべき推 進モデルの提言	8
1. 2016年と2017年の活動とその結果	8
(1) 調査の概要	8
(2) 2016年度の結果	8
(3) 2017年度の取り組み(2016年度の結果を踏まえて)	9
(4) 2017年度の結果	10
2. 2018年度(最終年度)の取組への反映と結果	11
(1) 経営学に関する基礎授業の導入	11
(2) 教諭のメンター的存在	12
3. 産高大が連携した県下に広めるべき課題解決型キャリア教 育推進モデルの提言	12
IV. 資料編(目次後掲)	14

## I. はじめに

現在、日本では急速な人口減少問題を抱える中、グローバル化、IoT化の流れの影響を受けている。野村総合研究所<sup>1</sup>の研究によれば、将来約半分の職業が機械に代替されるとされ、ニューヨーク市立大学大学院のキャシー・デビッドソン教授は、「2011年にアメリカの小学校に入学した子供たちの65%は、大学卒業後、今は存在していない職業に就く」と予測している。これまで知識の習得に重きを置いていた学校教育も、この様な時代を生き抜く為には、社会の変化に対応する力を育むことが重要であると、教育改革が始まっている。

福井県では、ふるさと教育や職業教育に加え突破力を身に付け、地元福井や世界で活躍出来る人づくりを目指し、様々な取り組みを行っている。しかしながら、50歳以上の教員の割合が4割を超え、今後、教員の大量退職時代を迎えるに当たり速やかな若手教員の資質向上が喫緊の課題である。

福井経済同友会人づくり委員会は、福井県の担い手として次の要素が必要であると考えている。

- (1) **地域のアイデンティティ** 地域の歴史・文化、産業や経済を理解し、思いや誇りを持つこと
- (2) **アントレプレナーシップ** 自ら課題を設定し、創造性、多様性、忍耐力をもって、これを解決して新しい価値を生み出していく力

この要素の醸成に向けて、平成27年度より福井県立高志高校のSGH(スーパーグローバルハイスクール)にて研究を重ねてきた。

経済同友会人づくり委員会では、平成29年4月に発行した活動報告(「福井の担い手作りを目指して」～産学連携の課題解決型キャリア教育活動報告)において、経済界と連携した課題解決型学習の取り組みは、これらの要素の醸成に効果があると報告し、以後、この活動を更に効果を高めながら県下に広めていくために、引き続き研究を行ってきた。

これらを踏まえ、当委員会では、若手教員の育成が課題となっている今、その資質向上に寄与する経済界との交流を行うシステムの確立を目指し活動した。その内容を次章「II. 若手教員と経済界との交流会の活動報告並びに継続・発展に関する提言」にて報告を行うと共に、継続・発展に向けて提言する。

---

<sup>1</sup> 野村総合研究所・オックスフォード大学 マイケル A. オズボーン准教授の計算(2015)

なぜならば、教員自身が実社会の企業活動に触れて学び、経済界と教育界が地域の担い手づくりについて議論する中で成長することが、課題解決型学習の発展、更には「福井型キャリア教育」の形成に、大きく寄与すると考えたからである。

合わせて、後述の「Ⅲ. 課題解決型キャリア教育の研究報告と県下に広めるべき推進モデルの提言」にて3年間にわたる福井県立高志高校SGH(スーパーグローバルハイスクール)での研究結果を総括し報告する。<sup>2</sup>

更に得られた成果により、地域のアイデンティティとアントレプレナーシップを県下で醸成していく為の、課題解決型キャリア教育の推進モデルを提言する。

---

<sup>2</sup> 当会は平成 27 年度から高志高校 SGH と研究活動を行っているが、「Ⅲ.課題解決型キャリア教育の研究報告と県下に広めるべき推進モデルの提言」については、福井大学竹本准教授が関与した 2016 年から 3 年間の研究報告。

## **Ⅱ. 若手教員と経済界との交流会の活動報告並びに継続・発展に関する提言**

### **1. 交流会の結成**

若手教員との交流会の実施に当たっては、福井県教育委員会の理解を得て、福井県教育総合研究所(以下、研究所)と幾度も協議を重ねた。

その結果、若手教員の自主研究サークル活動(福井県支援事業)<sup>3</sup>の中で、福井経済同友会が提供する企業見学、体験など異業種との交流を通してキャリア教育の視野を広げるためにサポートするキャリア教育サークルを募集することとした。

その中で応募があった3グループ<sup>4</sup>と進めることになった。この活動には、オブザーバーとして、福井県教育委員会、福井県教育総合研究所に参加いただいた。

### **2. 若大海と命名**

福井の担い手を育てていく教員、特に未来を支えていく若手教員は、教育現場に留まらず、外に出て視野を広げること、つまり、「大海を知る」を志し、福井経済同友会と交流をもって、柔軟に様々なものを吸収し、教育現場に活かして欲しいとの想いで、「若大海」と命名した。

### **3. 若大海の活動概要**

若大海は教員15名(他オブザーバー9名)と人づくり委員会16名で構成し、7月から翌年1月の間で以下の通り計4回開催した。(詳細は「資料編」を参照)。

- ① 第1回 初顔合わせ
  - ・ 交流会の目的の説明。
  - ・ 今後の活動についてのグループディスカッション
  
- ② 第2回 東工シャッター株式会社訪問
  - 工場見学、以下についての講話とグループディスカッション
  - ・ 企業理念
  - ・ 経営計画、経営方針(オンリーワンのモノづくり)、新製品開発

---

<sup>3</sup> 「平成30年度教員自主研究活動支援事業」若手教員が自らサークルを立ち上げ、課題を設定し福井県教育委員会に申請・認可を受け、一定の補助を受けながら研究活動を行っていく単年度活動で、本年度、県内約100グループが活動を進めている。活動期間は6月頃より翌年2月が目処となっている。

<sup>4</sup> ①福井県立大野高等学校のサークル、②福井県立三国高等学校と丸岡高等学校の合同サークル、③福井県内の職業系高等学校(福井農林高校、若狭東高校、敦賀高校、奥越明成高校、福井商業高校、武生工業高校の合同サークル)

- ・ 生産管理、5S(整理・整頓・清掃・清潔・しつけ)活動について
- ・ IoTの導入・活用事例
- ・ 目標管理・人材育成と人事評価

ねらい

通常の企業見学では体験できない実社会の企業マネジメントに触れる。

- ③ 第3回 福井大学産学連携本部 准教授 竹本 拓治氏の講話  
「地域経済界と協働したキャリアとアントレプレナーシップ教育の可能性」

ねらい

イノベーション先導型の現代に、必要なキャリア教育とは何か？  
今まで教員が考えていたキャリア教育の概念との違い、アントレプレナーシップとは何かとその養成について議論。

- ④ 第4回 TSUGI llc. (合同会社ツギ) 代表 新山 直広 氏の講話  
「ものづくり・ひとづくり・まちづくり」

ねらい

福井にIターンし起業、地域創生に取り組む若手経営者の講演を聴き、「地域アイデンティティを育むとは・・・」について議論。

#### 4. 初年度の若大海を終えて

福井経済同友会は長期にわたり、副校長・教頭との懇談会を定期的で開催し、教育界と経済界が考える福井のキャリア教育に関し、互いのギャップを克服すべく様々な議論を重ねてきた。この経験を活かし、人づくり委員会で検討した結果、次世代を担う若手教員との交流がこの課題を解決し、福井のキャリア教育の発展に寄与すると考え、これまでの管理職との交流から若手教員との交流に大きく舵をきった。

結果、若手教員と経済界との交流は全国的にも珍しく、このことは、後に他の経済同友会など各関係者からも高い関心を得ることとなった。

活動を振り返れば、当初は、生徒から地域企業のことを聞かれても企業HPを見て答えていたり、学校の勉強が社会でどのように役立つのかを説明できなかつたり、キャリア教育自体が進路指導になっていることにジレンマを持つ教員がいた。

教員の目線が変わり始めたのが、第2回の会社訪問で企業マネジメントを学んだ時である。経営者の「企業理念」のわかりやすい伝え方、グローバル競争で「オンリーワン」で勝ち抜く必要性、「5S運動」がやる気向上や社員教育へ繋がることなどから、企業マネジメントが教育現場にも必要であることを実体験から学んだ。

これまで地域企業との交流が少なく、ベテラン教員が若手にキャリア教育を伝えることが難しかった。実際、学校現場では、生徒が就きたい職業を既存の職種から選ばせる「逆算型キャリア教育」であった為、企業が求める人材像を育むキャリア教育とは大きなギャップがあった。

経済界と教育界が交流を進める中で、若手教員が、まずは自ら体験し資質を向上させることが重要であり、そこに「熱量」をもって、生徒がチャレンジすることに対して背中を押す取り組みをしたいと考え始めた。

開催当初からみれば、若手教員の変化は、その輝く目を見れば一目瞭然である。この変化が生まれたことが、若大海を立ち上げた初年度としては大きな成果であった。

<若大海に参加した当委員会委員の意見>

- ・現在の教員育成プログラムでは知り得ない「学び」を得られたのではないか。
- ・一見異質な関わりであるが、教員の探究心にも力となる活動であると再認識した。
- ・自社の凝り固まった社員育成プログラムにも変化を与えていきたい。
- ・経済界にとっても学びの多い機会であった。
- ・苦勞している教育現場の話聞き、経済界の協力も必要であると感じた。

## 5. アンケート結果

若大海の教員にアンケート調査を実施した(詳細は「資料編」を参照)。

アンケートの結果、企業経営の取組みを教育現場に活かせることが多いことに気付き、実際にクラスで取入れてみた例や、地域のことを意識し考える授業を現場で実践し、地元企業を生徒に紹介するなどの具体的な活動があった。

更には、若大海に参加し、教員自らが実社会を肌で感じ見聞を広め、社会的視点を養うことの重要性に気付き、教員としてのあり方に対する自己変革があったことは大きな収穫であった。

一方で、若大海を通して、企業が求める人材像を改めて認識した。必要となる主体性や創造性をどう育てていくかについて更に検討を要し、総合探究授業の推進に当たり、経済界との連携を通じその視点も取り入れたいという声も聞かれた。

## 6. 経済界との継続的な交流により若手教員の資質向上を図り、担い手づくりを推進するシステム提言

以上の事を踏まえ、若大海の目的を改めて定め、福井の担い手づくりの為に、教員、福井県教育委員会・福井県教育総合研究所および経済界が一体となってこのシステムを構築し、継続・発展させていくことを提言する。

### (1) 目的

- ① 若大海を通じて若手教員が幅広い見識と社会性を身につけ自己変革につ

なげること。

- ② 変化する実社会に必要な担い手の資質を議論し認識を深め共有し、これを課題解決型学習に活用するなどの取り組みを行い、アントレプレナーシップの醸成に寄与する。
- ③ 経済界との交流を通して、教員が地域の課題や企業・産業の良さを実体験し、得たことを子どもたちに伝えることによって、地域のアイデンティティを育んでいくこと。
- ④ 福井県教育委員会・福井県教育総合研究所と共に、この成果を県下に幅広く普及していくこと。

## (2) 継続・発展に向けたシステム

- ① 発表会を行うなどして若大海の認知度を高める、または募集方法を更に改善するなどし、県内全域から幅広く参加できる仕組みの構築。
- ② 経済界との交流により若手教員の資質が向上した結果を受け、「若手教員研修」に地域の企業経営の要素を加える、あるいは新たにプログラムを追加する施策。
- ③ 学校側の理解を得ながら、教員が毎回の交流会に参加しやすい環境を整えること。

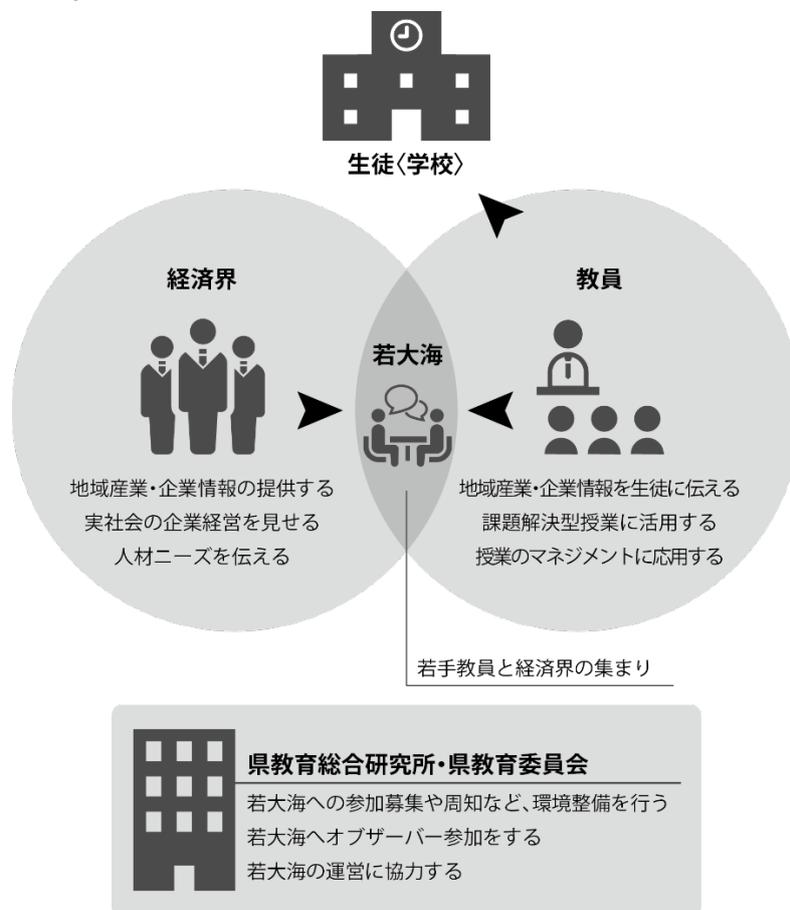


図 若大海を中心とする担い手づくりシステムの概念図

### (3)課題と具体策

若大海は、教員と経営者が目線を合わせ、楽しく何でも話し合える機会である。また経済界と教育界双方が相互理解を進める上で非常に意義のある活動である。

今回、初の試みであったにもかかわらず、若手教員は地域アイデンティティやアントレプレナーシップ教育の大切さを学び、さらに県内企業視察で産業界の現状を学んでいただいたと思う。

一方、経済界側は教員や生徒たちとの交流で、教育現場の現状や課題を直接見聞できたことは大きな成果であった。今、地域社会に求められる人材は多様化しており、生徒たちは考える力や創造性、多様性といった力をつけていく必要がある。そのためには、教員と経済界との交流を県内各市町に広めていき、福井型の担い手づくりシステムを確立していく必要がある。

急速な人口減少という国の経営自体が危ぶまれる現在、福井県が自立した地域となるため「福井型キャリア教育」の拡がりや定着がその一助となるであろう。そのためにも、若手教員との交流だけでなく、県内教員全てに普及することが必要である。

具体的には若手教員が若大海で学んだことを課題解決型授業に取り入れること、さらには、教員同士が地域産業や企業マネジメントの必要性を共有し学び合うことが大事である。これは若大海を卒業した若手教員が次のフェーズとして担うべき行動でもある。

福井県の人口は2040年には約63万人(国の長期ビジョン)と見積もられている。現在の約77万人(2019. 3現在)に比べて10万以上が減少すると予測されている。

若大海を中心とする担い手づくりシステムは、将来U・Iターン者を増やし人口減少に若干なりとも歯止めをかけられると考える。全国的にもユニークなこの「福井型キャリア教育」は他府県の教育関係者や経済界にとっても地域活性化に繋がるパイオニア的教育システムとなるであろう。

当会は若大海で培った教員と経済界とのネットワークを、必要な時にお互いが協力できる関係として継続しながら、福井型キャリア教育の発展に今後も努力していく所存である。

### Ⅲ. 課題解決型キャリア教育の研究報告と県下に広めるべき推進モデルの提言

2016年より2018年の3年間にわたり、福井県立高志高等学校SGHでの総合探究授業における課題解決学習のアドバイザーとして参加した。ここに、その活動結果を報告すると共に、課題解決型キャリア教育のあり方について考察したのでその推進モデルを提言する。

#### 1. 2016年と2017年の活動とその結果

##### (1) 調査の概要

福井経済同友会と福井大学は、2016年度と2017年度の2年間に、高志高等学校の協力を得て、同高校2年SGHコース生各年度80名に対し、次のような2つのグループに対する比較調査を実施した。

- ・ 地域企業が高校生の総合探究学習に関与し、調査研究する生徒グループ
  - 2016年度は「Biz2016グループ」、2017年度は「Biz2017グループ」とした(対象約40名)
- ・ 地域企業が高校生の総合探究学習に関与せず、自ら課題を設定し調査研究するグループ
  - 2016年度は「Non-Biz2016グループ」、2017年度は「Non-Biz2017グループ」とした(対象約40名)

表 グループの区分

区 分	2016年度	2017年度
地域企業の関与がある	Biz2016グループ	Biz2017グループ
地域企業の関与なし	Non-Biz2016グループ	Non-Biz2017グループ

Bizグループでは、2016年度、2017年度ともに、地域企業が課題提供を行い、そこから抽出された課題をもとに、仮説を立て、調査・検証を行い、最終的に課題解決案を提起する活動を、各年度1年間にわたり行った。

検証の比較方法は、「地域のアイデンティ」と「アントレプレナーシップ」の成長に関し、0から100までの間で基準となる回答の尺度を示し、尺度の数値にならって被験者が数値を記入する。年度当初の4月と年度末の3月に、生徒に同じ項目のアンケートを取り、成長の差分を比較した。

##### (2) 2016年度の結果

2016年度の結果では、Bizグループにおいて、地域のアイデンティに関する成長が顕著にみられた(2017年4月に発行した活動報告を参照)。またアントレプレナーシップに関しては、双方のグループともに成長したものの、開始当初からBizグループの回答値が高かったため、Non-Bizグループに対しBizグループの成長の優位性の判断が

難しかった。

### (3) 2017年度の取り組み(2016年度の結果を踏まえて)

2017年度は、地域のアイデンティとアントレプレナーシップの双方の成長において、より高い効果を目指すとともに、さらに課題解決型キャリア教育のあり方について、詳細に調べるため、以下の変更を加えた。

#### ① 比較調査における事前グループ分けの変更

2016年度のグループ分け方法であったBizグループへの立候補制から、2017年度は学校教員によるランダムな分け方に変更した。2016年度では、地域企業の課題を扱うという募集をかけ、Bizグループに志願する形であったことから、事前に一定のアントレプレナーシップ等の潜在能力をもつ学生が偏った可能性があった。

#### ② 課題発見力の養成に対する取り組み

2016年度は、調査テーマを地域企業が生徒に提示する形であったが、2017年度は生徒らが地域企業について学んだ後に自ら課題を見つけ出し、解決のためのテーマと仮説を構築する形へ変更した。変更の理由は、アントレプレナーシップの養成には、調査による課題解決力のみならず、能動的な課題発見(設定)力も必要であるからである。

#### ③ 大学生による参考事例の発表

課題解決活動をより身近に感じさせる取り組みとして、生徒に対し福井大学生による同様の活動の事例発表を行った。

#### ④ 調査項目に関して2016年度より細分化

地域のアイデンティティでは、

ア.地域の産業や経済の理解

イ.地域のアイデンティティの養成

ウ.地域への就業意識(Uターン意識)

の3要素に細分化、またSGHコース生であることから以下を設定した。

エ.海外産業展開志向の養成

アントレプレナーシップに関して当会が必要と考える以下の3要素に細分化した。

オ.チャレンジしあきらめない気持ち

カ.課題設定能力と課題解決力

キ.多様性を受け入れ柔軟に対応する力

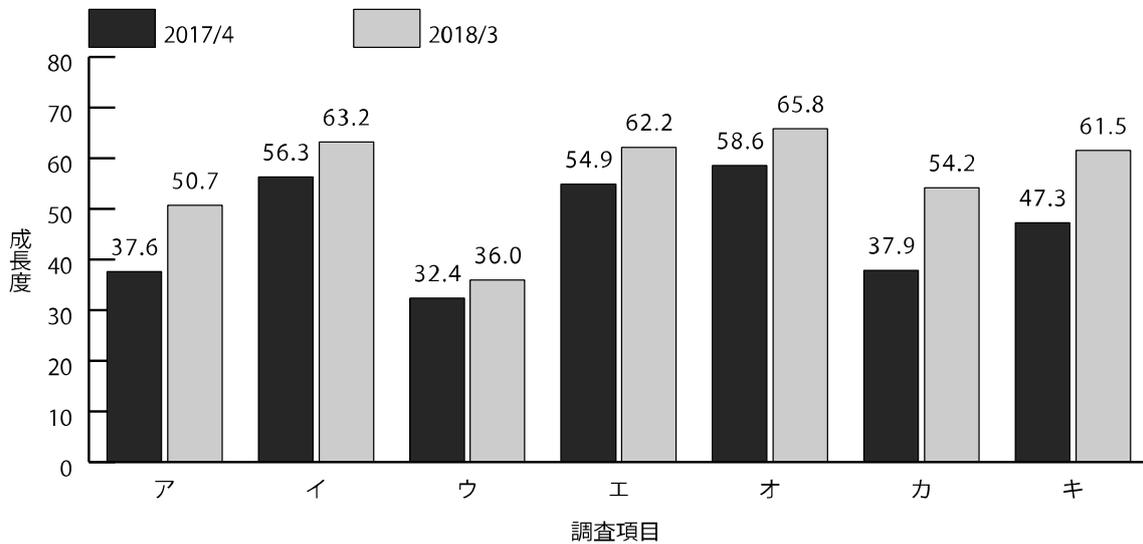
の3つの要素に細分化した。

以下のグラフは、これら上記ア～キの調査項目に分けた生徒の成長差分を、課題学習のスタート時と最終時で比較したものである。

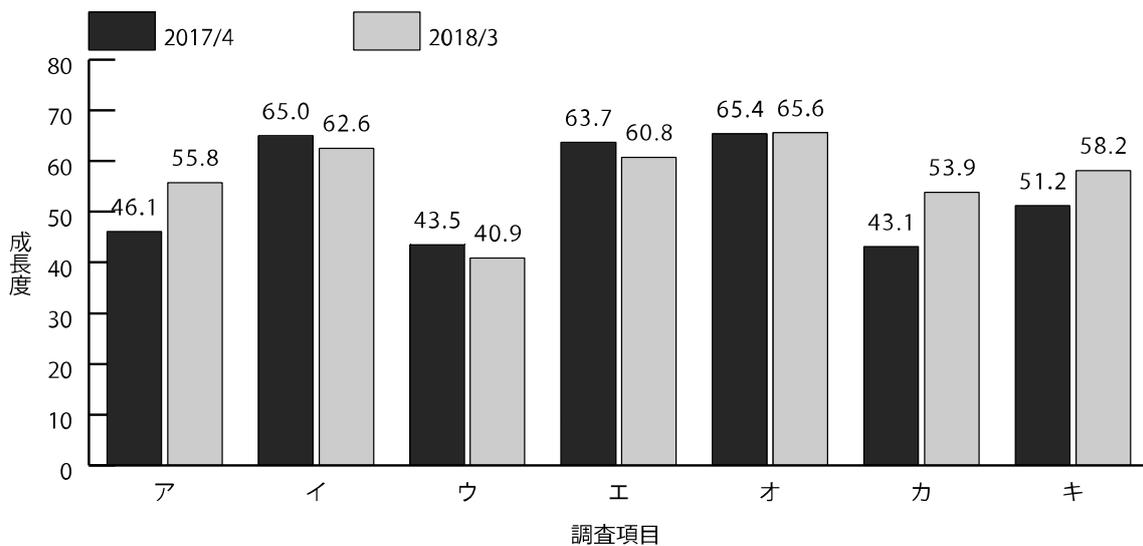
#### (4) 2017年度の結果

2017年度の結果を、以下に示す。

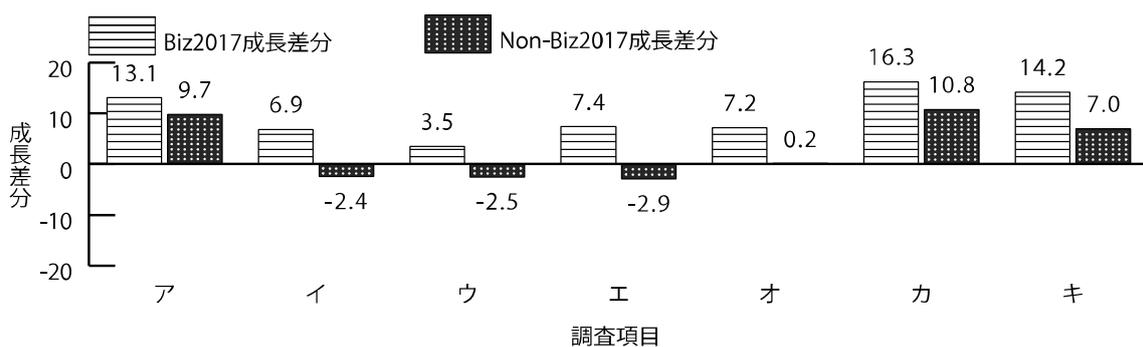
Biz2017グループ（地域企業関与あり）



Non-Biz2017グループ（地域企業関与なし）



各グループの成長差分の比較（各グラフの2018/3-2017/4）



「ア.地域の産業や経済の理解」について、双方のグループともに高い成長がみられた。これは両グループにおける1年間の国内外の社会調査活動の効果であった。生徒のアンケートやヒアリングでは、地域のことを能動的に学ぶきっかけになったとの回答が多く、Bizグループでは地域の産業に関し、特に新たな学びが大きかったことが伺えた。

「イ.地域のアイデンティティの養成」と「ウ.地域への就業意識」については、2016年度同様にBizグループにおいて効果を示した。地域企業から学ぶことの効果の高さを明確に示している。一方で、高校生にとって企業活動に関する調査を行う点で、経営学の知識が不足していることから、発表内容が具体性に欠ける内容になりがちなことや、調査途中で困難に直面していることも明確になった。

SGHコース生は海外に研修に出る生徒も多いことから「エ.海外産業展開志向の養成」についても調査したところ、具体的な企業テーマと仮説による効果もあり、Bizグループで高い効果を示した。

「オ.チャレンジしあきらめない気持ち」「カ.課題設定能力と課題解決力」「キ.多様性を受け入れ柔軟に対応する力」のアントレプレナーシップ項目については、2016年度よりも2017年度のほうがBizグループの成長が明確に示された。理由としては、テーマと仮説を設定する時点で、何度も困難に直面し、試行錯誤を繰り返す様子が見られたことが、結果としてチャレンジ精神や諦めない気持ち、多様性や柔軟性の養成など、高い効果につながったと考えられる。生徒自らテーマや仮説を探ることも、課題発見(設定)力の養成につながることが実証された。

## 2. 2018年度(最終年度)の取り組みへの反映と結果

2017年度の調査により、産高大(産業界・高校・大学)連携による課題解決型キャリア教育の手法が、高志高等学校において極めて高い効果を生み出すことが実証された。そこで2018年度に以下の変更を加え、最終的なモデル化を試みた。

### (1) 経営学に関する基礎授業の導入

2017年度において、高校生が企業課題を探り、解決する調査過程で、圧倒的に不足している知識がマーケティングを中心とする経営学の基礎知識であった。よって、2018年度においては、学習過程の中でこの基礎授業を導入した。

企業経営は持てる資源を見つめその強みを活かしながら、オリジナリティーを重んじ、コト・モノ・サービスを生み出し、それを社会に普及していく一連のマーケティング活動の連鎖であり、学校教育における課題解決の流れにとって、実践的な模範となるからである。

結果、2019年2月に行われた最終発表では、地域企業とのコラボレーションの可能性など具体的で、且つターゲットや解決手法が例年に加えさらに明確化されていたことから、課題解決型キャリア教育にマーケティングを始めとする経営学の基礎学習を取り入れる試みは効果的であった。

## (2) 教諭のメンターの存在

2017年度に課題解決に必要な社会調査を学ばせる為に、大学生の海外における課題解決学習の事例発表を高校生に行ったところ、とても好評であった。ひとつは自分たちと年齢が近いこともあり、これまでの科目学習とは異なる調査活動に対し、自分たちでもチャレンジできるという意識を高校生が持ったことも好評であった要因として挙げられる。そこで2018年度は大学生と高校生のより深い関係性を目指し、事例発表に加え、高校生1チーム5名程度に対し、大学生1名の割合でメンターを設定した。

更に高志高等学校では、本取り組みが3年目となるため、関係する担当教諭は本取り組みに慣れている様子が伺えた。大学教員による調査方法や経営学の基礎に関する授業と、地域企業からの学びの活動を補う形で、高校担当教諭が各チームに適切なアドバイスを行っており、そのことが最終発表でうまく機能していた。

このことから大学生は、自らの課題解決学習の参考事例の発表で関わる。そして高校生の課題解決活動のメンターとしての機能には、常に高校生の各チームと顔を合わせることでできる高等学校教諭のスキル向上が極めて効果的であることがわかった。

また大学生のメンターの場合に効果的であった点は、年齢の近さから相談しやすいこと等も挙げられたことから、比較的若手の教諭のほうがメンターとして適しているといえる。

## 3. 産高大が連携した県下に広めるべき課題解決型キャリア教育推進モデルの提言

以上、2016年度から2018年度にわたる3年間の取り組みから、実社会で必要となるアントレプレナーシップと、将来の福井地域の発展の担い手となる人材育成としての地域のアイデンティティを育成するために、高等学校の総合探究の時間において、地域産業界、地域の大学と高等学校がそれぞれの役割を担いつつ、連携して課題解決型学習を進めていくことで、高い効果を発揮することが実証された。

またこの取り組みを広めるためには、今後の課題として、高志高等学校の担当教諭らのように、現場で生徒に寄り沿いアドバイスを行うことのできる教諭の育成が必要となる。そのためには、これまでの教諭が学ぶ研修の科目学習とは異なった、新しい視点でのスキル習得が必要となる。

以上の3年間の高志高等学校SGHの取り組みを通して、福井地域の創生におけるキャリア教育の今後の具体的な行動指針について、次のようにまとめる。

- (1) 企業のマーケティング等の経営学、および課題解決における社会調査手法について学ぶ機会を教員育成プログラムに入れることが必要である。
- (2) 若大海を、教員が企業経営についても学び、総合探究を進めるに当たり必要な助言を経済界から得る事が出来る重要な機会とする。

そして、以下のようなスキームに沿って、極めて高い効果を示した取り組みを、県下全域に広めることを提言する。

### 産高大が連携した課題解決型キャリア教育推進モデル

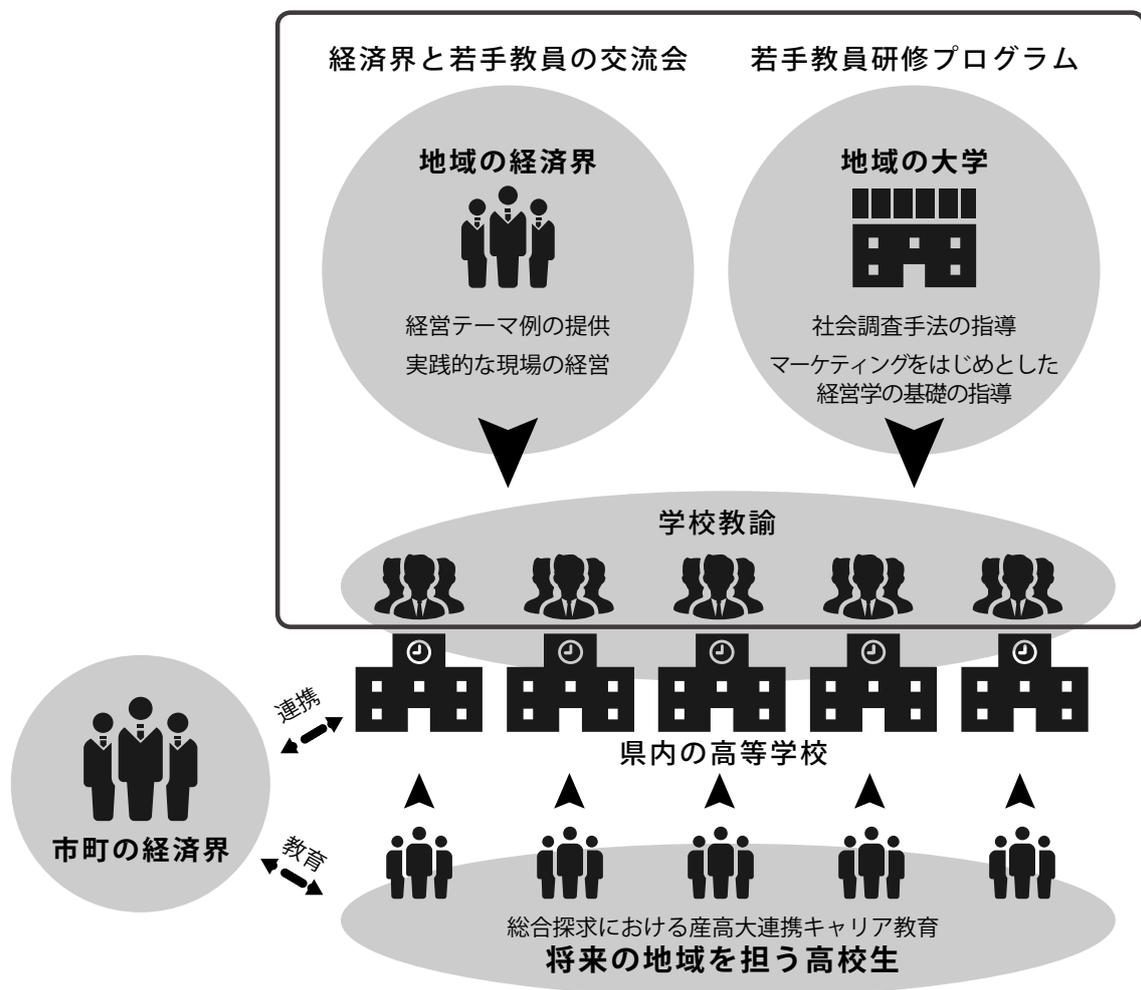


図 提言する課題解決型キャリア教育推進モデル  
 (経済界、大学が高等学校の教諭の育成に関わりながら推進していく)

以上。

#### **IV. 資料編**

	ページ
■若大海 活動内容	15
(1) 第1回若大海	15
(2) 第2回若大海	16
(3) 第3回若大海	18
(4) 第4回若大海	21
■若大海アンケート集約結果	24
■若大会参加各ワーキンググループのレポート	27
■人づくり委員会 活動経過	36
■人づくり委員会 名簿	

## ■若大海 活動内容(計4回)

### (1) 第1回若大海

- 日 時: 平成30年7月10日(火)16時より  
会 場: 織協ビル8階  
出席者: 若手教員11名、研究所・県教育庁8名、当会16名  
内 容: ① 交流会の目的の説明  
② 今後の活動についてのグループディスカッション

#### <若手教員から>(抜粋)

- ・学生に基礎的な力となる「人間力」を身に着けさせるには、どんな教育をすれば良いかを教えてほしい。
- ・教員は経済界の仕組み、企業の仕組みを知らない。
- ・学生から企業のことを聞かれても、当該企業のHPを見て答えているのが現状。
- ・学生から勉強する意味を問われても、社会でどう活用できるか説明できない。
- ・現状のキャリア教育は進路指導だけになってしまっている。
- ・社会に出ることを前向きに考える生徒が少ない。
- ・教員自身が企業見学や就業体験をすることで、実体験として生徒たちに進路指導でき、働く意欲を持たせることに役立てるのではないかと。



佐々木委員長の挨拶



グループディスカッション

### (2) 第2回若大海

- 日 時: 平成30年8月22日(火)13:30より  
会 場: 東工シャッター株式会社  
出席者: 若手教員13名、研究所・県教育庁8名、当会12名  
ねらい: 通常の企業見学では体験できない企業マネジメントを学ぶ  
内 容: 講話、工場見学、グループディスカッション  
講 話: 東工シャッター株式会社 代表取締役 佐々木知也(当委員長)

- ・企業理念、経営計画、PDCA
- ・経営方針(オリジナリティーの重要性、オンリーワン)
- ・生産管理、5S(整理・整頓・清掃・清潔・しつけ)活動について
- ・IoT導入、活用の事例
- ・目標管理・人材育成計画と人事考課の仕組み

### <若手教員から>(抜粋)

- ・社長の考えが「企業理念」として、わかりやすく明確に指示されており、教育現場にも必要なことだと感じた。
- ・教科書では理解できない「ものづくりへの思い」が伝わってきた。
- ・グローバル競争の中で勝ち残るため「オンリーワン」の必要性が理解できた。
- ・工場見学では実際の環境を肌で感じる事ができ、「働く」ことの大変さや「5S運動」などの必要性を感じた。
- ・5Sの必要性を学び、教室の整美や机の整美にもっと注力すべきだと感じた。
- ・社員を教育しながら、改善表彰制度などで、やる気を引き出す仕組みが出来ていると感じた。教育現場においても、生徒をどのようにやる気にさせるかが課題である。
- ・自分自身が目で見て、聞いてきたことを、実際の進路指導で生徒に話したところ、生徒の聞こうとする態度が全く違った。活きた情報を生徒に還元できるのが、この交流会の大きな意義だと感じている。



工場見学の様子



グループディスカッション

### (3) 第3回若大海

日 時: 平成30年10月22日(月) 16時より

会 場: 織協ビル8階

参加者: 若手教員13名、研究所・県教育庁8名、当会11名

ねらい: イノベーション主導型の現代に、必要なキャリア教育とは何か。今まで教員が考えていたキャリア教育の概念との違い。アントレプレナーシップの養成を議論。

内 容： 講話、グループディスカッション

講 話： 福井大学産学官連携本部 准教授 竹本 拓治 氏

「地域経済界と協働したキャリアとアントレプレナーシップ教育の可能性」  
要 旨： 竹本氏は、学生時代に創業し経営者として起業した経験を持つ。講義では、国際競争力が低下した日本経済の現状を踏まえ、今後求められる人材育成に必要なキャリア教育のあり方について講義いただいた。

竹本先生が受け持つ大学生が実際に取り組んでいる「地域企業との共同研究」の具体的事例や、当委員会も関与している高志高校SGH課題解決授業で得られた結果をもとに、「地域アイデンティティの教育例」や「アントレプレナーシップ教育における経営学の大切さ」をお話しいただいた。

最後に、キャリア教育の本質とは、キャリア教育は職業教育のみならず、「子ども・若者が、社会の一因としての役割を果たすとともに、それぞれの個性、持ち味を最大限発揮しながら、自立して生きていくために必要な能力や態度を育てる教育」である、と話された。

また、創造性、柔軟性、新しいものを創っていくアントレプレナーシップを養うには、企業経営やマーケティングなどを学ぶ必要がある、などとお話しいただいた。

#### <若手教員から> (抜粋)

- ・学校現場が考える「キャリア教育」とは、生徒にどんな職業に就きたいか現在の職種から選ばせる逆算型であるが、企業が考えるものは、先ずは自分がどうりたいのか、自分を知ったうえで進む道を選択してほしいと考えている。このキャリア教育の考え方にギャップを感じた。
- ・学校現場でも、地域の企業・地域の人との交流や関わりを増やすと良い。
- ・講義でキャリア教育の本質を学び、現在の授業では、基礎学力を身に付けるレベルに沿った学習が中心で、柔軟に考えさせるカリキュラムが少ないと感じた。
- ・これから必要となる「自律性」、「多様性」を身に付けるうえで、様々な人との関わりが重要であり、先ずは教員が実践し、生徒に伝えていければと思う。その意味でこの若大海の活動は意義深い。
- ・生徒は「何のために勉強するのか」を理解・実感する機会が少ない。従って企業との共同研究のような取組みを増やすことで、自分の興味を考える機会や「やる気」を引き出すことが出来るのではないかと。生徒(中高生)に年齢が近い大学生との関わりも有効である。

#### <教育総合研究所から>

教育現場において、学習指導要領が改訂になる。これまでの「総合的な学習の

時間」が「総合的な探究の時間」と名前を変え、より主体的で深い学びが求められる。竹本准教授の「変革のスピードが激しさを増すなか、これからは、社会が求める人物を育てることよりも、新しい時代を創ることが出来る、そしてそれにチャレンジしていくことが出来る人を育てていく必要がある。」という言葉からより積極的に社会に参画していく人材を育成する必要性を再認識した。



竹本准教授の講義



ディスカッションの様子

#### (4) 第4回若大海

日 時： 平成31年1月16日(水) 16時より

会 場： 織協ビル8階

参加者： 若手教員9名、研究所・県教育庁8名、当会15名

ねらい： 福井にIターンし起業、地域創生に取り組む若手経営者の講演を聞き、「地域アイデンティティを育むとは…」について共に議論する。

内 容： 講話、グループディスカッション

講 話： TSUGI llc.(合同会社ツギ) 代表 新山 直広 氏  
「ものづくり・ひとづくり・まちづくり」

要 旨： 新山氏は大阪府吹田市出身で、大学時代に参加した河和田アートキャンプに参加した際、伝統工芸などものづくりに興味を持たれたことをきっかけに、その後、鯖江市河和田地区に移住、合同会社ツギ代表でデザイナーとして活躍している。

これからは地域活性の時代と思い2008年に河和田地区へ来たが、ものづくりが活性化しないと、まち全体が活性化しないと認識した。職人は技術力があっても、売り方を知らない。そこで、製造から流通・販売までサポートできるデザイナーになることを決意した。

「創造的な産地をつくる」産地に特化したデザイン事務所を作り、地方でデザインを生業とする。デザインとは、本質を見抜き、構造を計画、正しい方向に最適化すること。また自ら仕事の領域は作らず、論より実践を「理念」としている。

「RENEW」の活動を通じ、産地の意識を変え、持続可能な仕組みの確立に取り組んでいる。モットーは、当事者意識をもち「熱量」をもって行動すること。ただし、やっていることは「0」から「1」を創り上げるのではなく、「1」の魅力を磨き上げ繋ぎ合わせることであり、結果として大きな力になった。この活動により、雇用の創出効果だけでなく、地域住民や大学生が参画することなどで関係人口が増加、地域に変革が起きている。

これからの時代には、考える力としての創造性が必要になる。学力日本一の知識・理解を踏まえ、創造性を養ってほしい。創造性の醸成には、視点の増加、成功体験、他者評価が必要である。

「福井なんか」「福井が嫌だから県外に出る」という意識ではなく、県外に出ても帰ってきたくなる、そんな郷土愛をもった子供たちが増えていくと良い。今後も福井を明るく楽しくしたい。

#### <若手教員から> (抜粋)

- ・県外出身である新山氏の福井への愛情を持った話から、福井県民が見過ごししている福井の良さに気付かせてくれる熱量を感じた。また、これだけ楽しそうに話していることに、驚きと感動をもらった。
- ・何かを動かすために、最終的にはリーダーの「熱量」が重要であると感じた。
- ・身近に存在する素晴らしいものに、我々がもっと気づき、子供たちに伝えていかなければならないと感じた。
- ・外を見過ぎてしまい、内(地域)の魅力を見ていない。もっと体験をさせていくことで、生徒が「郷土愛」を持つと考える。
- ・流通までアドバイスしている点で、授業でも、切り取った一部分でなく全体感を持った授業をすることで、当事者意識が芽生えるのではないかと考える。
- ・各高校でも地域活動への参加を行っており、それを生徒にSNSなどで発信させ、他者から評価してもらい生徒の自信に繋げていくような活動を取り入れていきたい。
- ・教育現場での課題として、最近の生徒はネット上に出ている情報をいわゆるコピペしていることが多く、創造力が不足している。実際、授業でも感じる。
- ・福井を愛する心を育てると同時に、他の地域の良さを認める心を持つ、視野を広げることが、多様性、創造力・デザイン力を高めていくことになると思う。
- ・前回の竹本准教授の話とも共通して感じたことは、時代の変革に向き合い行動できる人を増やしていかなければならない。これからは自分のキャリアをデザインできる力が必要になると再認識し、教育現場としては、生徒がチャレンジすることに背中を押す取組みをしていきたい。みんなが、世の中を変革できる力を持っていることを生徒に伝えたい。

### <教育総合研究所から>

これまでの若大海では、2回目に「マネジメント・企業経営」、3回目に「キャリア教育とアントレプレナーシップ」、そして今回は「デザイン力」をテーマに学ばせていただいた。本日お話いただいた「デザイン力」は、ビジョンや見通しを持つ上で教育現場において今後ますます必要となる力である。これまでを振り返ってみると、当初、若手の先生がたは、どう交流していいか、とまどう場面が多かった。それが少しずつ繋がり始め、若手の先生がテーマについて真剣に考え、経済同友会の方と語り合えるようになっていった。今年度は、様々な交流の機会を通して、経済界のみなさんから「刺激」や「思い」などをたくさんいただき本当にありがとうございました。



新山氏の講話



グループディスカッション

## ■アンケート意見集約

(設問)

### 1. 若大海に参加した動機とは？

- ・経済界との交流により指導の幅を広げたい
- ・新たな刺激、学校では得られない経験、体験をしたい
- ・福井の経済を理解し、授業に活用したい
- ・教育研究所等からの紹介

### 2. 若大海ではじめて知り得たこととは？

- ・学校では教わらない新鮮な話であった。
- ・経済界の生の話を聞いて、理論だけではダメだと思った。
- ・経済界が教育に非常に高い関心を持っていること
- ・企業経営の難しさ、会社の理念、社員の時間管理、モチベーションの上げ方
- ・企業と教育の共通点
- ・企業が求める人物像
- ・経営者が持つ経営観、経済観
- ・地域産業の横のつながり

### 3. 若大海で最も心に残ったこととは？

- ・東工シャッターの工場見学。全社員が当事者意識をもって取り組んでいる点。
- ・熱意の大切さ。社長、講師から熱意を感じた。
- ・キャリア教育、地方創生とまちづくり
- ・企業経営者から、地域を良くしていこうという意見が常に聞けたこと。
- ・様々なアドバイスをいただけたこと

### 4. 若大海で最も学んだことは？

- ・同友会の方々が教育界に関心をもっており、連携しながら教育を良い方向へ導いていけると感じた。
- ・自ら率先して行動すること。色々な事に挑戦し、見聞を広める事が大切だと気付いた。
- ・生徒の主体性を伸ばすことの重要性
- ・「教員の世界」と「経済界・世の中」とのギャップを肌で感じた。
- ・どんな生徒を育てていくことが大切か。創造的な人材の育て方。
- ・総合探究授業での新たな視点
- ・地域が抱える課題。
- ・プレゼン

**5. 若大海で自分自身に変化したこととは？**

- ・生徒を一番に考えた教育内容を考えていかなければならない
- ・企業との連携を模索したいと考えるようになった
- ・社会人一年目として背筋が伸びた。教員としての意識が強くなった。
- ・今まで消極的であったが、積極的に動くようになった。
- ・高校での教育や指導が、社会人となった際に必要になると感じた。
- ・物事を「社会的視点」で見えるようになった。今後の企業との連携授業を考えるとワクワクしている。
- ・生徒が就職した先のことを考えるようになった。
- ・地元のことを意識した授業づくり

**6. 若大海で得たものを授業に取り組んだことはありますか？**

**7. 6での授業で生徒たちに変化の兆しはありましたか？**

- ・交流で得た話題やこれからの地元について、授業で討論した。  
一部の生徒は将来の地元をどうしていくか考えるようになり、また、自分がどうなりたいかを先生と話し合ったりするなどの変化があった。
- ・5Sの活動などをクラスで取り組んだ。生徒に、時間管理や清掃での変化があった。
- ・授業に取り入れてはいないが、県内企業を生徒に紹介した。  
地元企業ということもあり、生徒は興味深く聞いていた。
- ・経営者の方が求める高校生像を生徒に伝えた。
- ・東工シャッターでお聞きした「力」を発揮する工夫（作業の簡略化、気づきコメント）を授業で話した。

**8. 若大海で改善してほしい点やもっと学びたい点はありますか？**

**9. 若大海の今後の活動でさらに期待・要望することとは？**

- ・様々な業種、分野の方の講演を聞き、各業界や地域経済での課題を学びたい。
- ・会社経営、起業・創業について学びたい。  
今後、職業系WGで一つの会社を立ち上げてみたい。アドバイスが欲しい。
- ・今後も若大海を継続し、連携を深めていきたい。より多くの学校が関わると良い。
- ・継続、教育現場の体験
- ・「教員研修」という名で取り入れる必要はないと感じる。
- ・欠席者への活動内容の配布。
- ・開始時間を早めてほしい（遠方からの参加者）

10. この活動を通じて教員研修プログラムに取り入れたい内容はありますか？

- ・同友会と討論会。
- ・企業見学
- ・経済界や経営者から「経営理念」「社員教育方法」をテーマに講義してほしい。  
考え方や視点・熱意が伝播しそう。
- ・生徒の主体性をつけさせるためにどんな実践例があるのか知りたい。

その他

- ・若大海で出来た「縁」を活かしていきたい。  
新山代表とは早速連絡を取り、県外企業の視察に行くことになった。  
生徒が、社会で役に立っていると実感できる場を経済界の方や教育現場の皆で作って、福井を躍動させていけたらと思っている。

## 【ふるさと教育WG】地方創生を担う人材をはぐくむふるさと教育の在り方の研究

三国高等学校	教諭	坪田 亮二
	教諭	姉崎 将太
	教諭	大岡 幹生
	教諭	木村 祐輝
丸岡高等学校	教諭	宇城 康太

### 1 はじめに

教育総合研究所では、県内高等学校の地歴・公民科教員5名とともに、地方創生を担う人材をはぐくむふるさと教育の在り方を研究し、経済の観点から地域の活性化を考察し、ふるさと福井の良さを見直す教材づくりを始めた。その際、企業ポリシーに基づく具体的な企業活動および地域活性化の施策等に関する情報収集を目的に、福井経済同友会人づくり委員会（以下、経済同友会）と連携した。

### 2 取組内容

#### (1) 情報収集

##### ①若手教員と産業界との交流会（第1回～第4回）への参加

- ・活動概要は、若手自主サークルと同様

##### ②観光業に携わる地元企業経営者との懇談

- ・あわら観光株式会社 代表取締役 松原淑裕 氏からのインバウンドを含む福井県の観光業の現状や改善策等の話題提供に続き、魅力的な観光資源への積極的な誘客をどう図るべきか等について情報交換

#### (2) 教材作成

##### ①教材の方向性

- ・情報収集の内容を踏まえ、知識構成型ジグソー法に基づき、地域が抱える課題を理解し、新しい地域社会の創造を考察する教材を作成

##### ②教材のテーマ（例）

- ・福井のひとの流れはどうなっていくのか
- ・福井のしごとやくらしはどうなっていくのか
- ・若い世代の結婚・出産・子育てどうなっていくのか
- ・地域の安心なくらしを保てるだろうか
- ・地方自治体の機能は維持されるだろうか

### 3 おわりに

キャリア形成において、「ふるさと」の視点で思考することは重要である。自己のアイデンティティや生活基盤のもととなる「ふるさと」を基点にすることで、安定したキャリアとなり、経済同友会が育成したい資質・能力の「地域アイデンティティ」の醸成にもつながる。激しい変化が予想されるこれからの時代、「ふるさと福井」を思いながら活躍する人材の育成を目指す方向性は、企業、学校ともに同じである。これからも経済同友会と連携して、より良い教材づくりを推進していく。

【若手自主サークル】「若手教員と産業界との交流会」事業に係る産業界との連携について

大野高等学校 教諭 佐藤 拓也  
教諭 長田 嘉紀  
教諭 榎桁 公博  
教諭 遠山凜太郎

- 1 目的：「総合的な学習の時間」での助言や、交流を通して教員が得た知見の活用。
- 2 活動内容：本交流活動は、2(1)交流活動による知見向上と、2(2)同友会会員による生徒への直接の助言によって構成された。

2(1) 交流については、4回の交流や懇親会を通して、普段得られない刺激が得られた。特に、大学で行われた課題解決型の探究活動についての講演や、実際の地域に根付いた起業の在り方の講演などを聞くにつけ、「総合」における探究活動のイメージーションが非常に掻き立てられた。個人としても、近年、中高連携や高大連携の在り方を模索しているところであったが、更に、地元産業界との連携を視野に入れる必要性和意欲を強く持つに至った。その結果、複数プランの構想を持つことができた。来年度については、3年生担当ということもあり、直接的な関わりは難しくなるが、今後へ構想を進めていくと共に、今回参加した若手教員への指導という形で来年にこの知見を活かしていく。更に、再来年度でのプラン実現を目指し、下準備を進めておく。

また、「総合」の在り方についても貴重な助言を得ることができた。高志高校の探究活動に参加した経験を基にした、具体的提案も得られた。本校で1回、意見交換の場も持たれた。

2(2) 直接の生徒への助言の場の設定については、本校単独で2回、場を設けることができた。1回目は中間報告会での助言である。探究活動の発表の場であるポスターセッション前に、中間報告会として来校を依頼し、直接生徒への助言を依頼した。この際には、探究テーマ毎に分かれ、福井大学の教育学の先生にも依頼して実施した。その際、テーマ設定の動機について生徒につきつめて質問する姿勢が印象深かった。教員は、そこまで動機を追及したりはしない。その後の探究を進める姿勢にも当然影響を与えるため、動機へのこだわりは我々も持たなければならぬと強く思わされた。

2回目は本番のポスターセッションでの助言である。実際に生徒の発表を見た上で、生徒への助言を得た。生徒達も、直接助言や評価を得たことで意欲が増進していた。やはり教員以外の視点というだけでなく、実際の企業家からの助言が得られるということは、生徒達にとって大きな励みになったようである。活き活きと発表する生徒達の姿から、やはり外部との連携が必要であると印象付けられた。

本校にも足を運んでくださった佐々木副会長や小林委員長、経済同友会事務局のお二人をはじめ、経済同友会の方々には大変お世話になった。皆様のご厚意には、この場にて心からの謝意を表す。

【若手自主サークル】専門学科における横断的学習の在り方についての研究  
～経済同友会との交流を通して～

若手教員専門科横断学習会  
福井農林高等学校 教諭 大田 光宣  
若狭東高等学校 教諭 田中 誠悟  
敦賀高等学校 教諭 南出 龍哉  
奥越明成高等学校 教諭 錦織 歩

1 はじめに

今年度、同期採用となった職業系高校（農業・工業・商業・福祉）教員と経済同友会及び教育関係者との交流を通して、福井の教育についての意見交換や地域産業との連携について取り組んだ。そのなかで、企業を訪問して経営理念を聞いたり、まちづくりと地方創生について大学講師の講演を聞いたりして、これからの福井の教育を考えた。また、教員同士で意見交換を行い、自分たちの教育観を見つめ直すきっかけとなった。

2 研究の概要

(1) 経済同友会との交流

- ・第1回 若手教員と産業界との意見交換会  
経済同友会のメンバーと意見交換を行い、今後の方針について考えた。
- ・第2回 工場見学と経営理念について  
東工シャッター株式会社を訪問し、工場見学や社長による経営理念について講話を聞き、ディスカッションを行った。
- ・第3回 福井大学産業界連携本部 准教授 竹本拓治氏による講話  
「地域産業界と協働したキャリアとアントレプレナーシップの教育の可能性」  
キャリア教育について講話を聞き、ディスカッションを行った。
- ・第4回 合同会社TSUGI 代表 新山直広氏による講話「地方創生と街づくり」  
デザイン・ものづくり・地域といった領域を横断しながら、地域や地場産業のブランディングを手掛けた未来産地プロジェクトについて講話を聞き、今後の活動について考えた。

(2) 職業系高校若手教員の交流

- ・授業づくりについての意見交換や教育現場での悩み相談
- ・遠隔システムを活用した意見交流
- ・企業や県外職業系高校への視察

3 おわりに

この研究活動で得られた知識や経験を今後の教育活動に活かし、福井県を担う人材を育てていきたい。また、職業系高校と経済界が連携し、生徒が地元産業活動に携わっていると実感できるプロジェクトを展開していきたい。

■福井経済同友会 人づくり委員会 人づくり部会の活動経過  
委員会と委員会事業の開催

第1回企画部会

日 時 平成29年6月8日(木)  
会 場 織協ビル805号室  
テーマ 平成29年度の人づくり部会活動内容について  
参加者 15名

福井市キャリア教育推進協議会

日 時 平成29年4月19日(水)、6月19日(月)  
会 場 福井市役所  
テーマ 平成29年度職場体験学習について  
参加者 2名

高志高校SGH授業の視察

日 時 平成29年5月2日(火)、23日(火)、6月7日(火)  
会 場 高志高校  
参加者 6名

高志中学(高志学)リレー講座視察

日 時 平成29年6月9日(木)  
会 場 高志中学校  
講 師 福井県立大学 地域経済研究所 所長 南保 勝 氏  
参加者 3名

高志中学(高志学)リレー講座視察

日 時 平成29年7月13日(木)  
会 場 高志中学校  
講 師 熊澤商事株式会社 熊澤 喜八郎 氏  
福井めがね工業株式会社 多田 弘和 氏  
参加者 3名

高志高校SGH課題に対する仮説発表会の視察

日 時 平成29年7月11日(火)、7月18日(金)  
会 場 高志高校  
参加者 6名

#### 第2回企画部会

日 時 平成29年7月24日(月)  
会 場 織協ビル805号室  
講 師 株式会社福井銀行経営企画グループ 白崎 一雄 氏  
同 田谷 良人 氏  
テーマ 福井銀行のCSR活動～将来の地域の担い手づくりに向けて～  
参加者 14名

#### 第3回企画部会

日 時 平成29年9月26日(火)  
会 場 織協ビル803号室  
テーマ 教頭会に代わる「若手教師との交流会」について  
参加者 10名

#### 第4回企画部会

日 時 平成29年11月9日(木)  
会 場 福井県教育総合研究所  
テーマ 教育博物館見学及び福井県の教員の研修の現状について  
講 師 福井県教育総合研究所 所長 小和田 和義 氏  
同 センター長 鈴木 利英 氏  
同 センター長 吉田 繁 氏  
参加者 8名

#### 第5回企画部会

日 時 平成29年12月5日(火)  
会 場 織協ビル802号室  
テーマ これまでの「高志高校SGH課題解決型授業」取組み総括  
講 師 福井大学産学官連携本部 准教授 竹本 拓治 氏  
参加者 11名

#### 高志中学(高志学)リレー講座視察

日 時 平成29年12月7日(木)  
会 場 高志中学校  
講 師 日東シンコー株式会社 相澤 泰之 氏  
株式会社田中化学研究所 田中 孝明 氏  
参加者 2名

高志中学(高志学)職場体験 成果発表会視察

日 時 平成29年12月15日(金)  
会 場 高志中学校  
参加者 3名

福井市キャリア教育推進協議会

日 時 平成29年12月21日(木)  
会 場 福井市役所 別館中2階 会議室  
テーマ 福井市キャリア教育プログラムの実施状況について  
参加者 2名

福井県教育総合研究所との意見交換会

日 時 平成29年12月25日  
会 場 福井県教育総合研究所  
テーマ 平成30年度教育プログラムにおける当会との連携協議  
参加者 委員長、部会長、副部会長、事務局

第6回企画部会

日 時 平成30年3月26日(月)  
会 場 織協ビル802号室  
テーマ 福井県の教育の現状と課題  
講 師 福井県教育庁 学校教育幹 佐々木栄秀 氏  
同 義務教育課 主任 西 健 氏  
同 高校教育課 主任 竹内 英俊 氏  
同 高校教育課 主任 加藤 龍一 氏  
参加者 17名

第7回企画部会

日 時 平成30年4月26日(木)  
会 場 織協ビル802号室  
テーマ 高志中高との今年度の取組について  
講 師 福井県立高志高等学校 校長 平松 正尚 氏  
同 教頭 入羽 弘之 氏  
同 教諭 松田 純典 氏  
同 教諭 吉田 充宏 氏  
同 教諭 山本 卓也 氏  
福井県立高志中学校 校長 山川 満寛 氏  
同 教頭 朝倉 剛司 氏

同 教諭 北川 郁雄 氏  
参加者 18名

高志高校SGH(1年生)講義の視察

日 時 平成30年1月17日(水)、1月19日(金)  
会 場 高志高校  
講 師 前田工織株式会社 前田 征利 氏  
東工シャッター株式会社 佐々木 知也 氏  
同 西本 佳隆 氏  
参加者 2名

高志高校SGH(2年生) 報告会

日 時 平成30年2月27日(火)  
会 場 高志高校  
内 容 「課題研究授業」の最終プレゼンテーション  
参加者 4名

高志高校SGH(1年生) 報告会

日 時 平成30年3月16日(金)  
会 場 高志高校  
内 容 「グローバル探究授業」学習成果発表会  
参加者 4名

福井市キャリア教育協議会

日 時 平成30年2月22日(木)  
会 場 福井市役所  
参加者 2名

高志中学(高志学)リレー講座視察

日 時 平成30年3月15日(木)  
会 場 高志中学校  
講 師 福井放送株式会社 山田恵梨子 氏  
AOIホールディングス株式会社 武田 一夫 氏  
参加者 2名

福井県教育総合研究所との意見交換会

日 時 平成30年3月20日(火)、平成30年5月30日(水)  
会 場 福井県教育総合研究所

テーマ 若手自主研究サークルとの連携について  
参加者 5名

#### 高志高校SGH 打合せ

日時 平成30年3月28日(水)  
会場 高志高校  
テーマ 平成30年度のSGHおよびSSH活動計画について  
参加者 5名

#### 第8回企画部会

日時 平成30年6月11日(月)  
会場 織協ビル802号室  
テーマ 高志学連携課題解決型キャリア教育の方向性について  
県内若手教員との交流会について  
オブザーバー 福井県教育総合研究所 課長 中森 雅巳 氏  
同 主任 森田 史生 氏  
参加者 15名

#### 高志中学(高志学)リレー講座視察

日時 平成30年6月14日(木)  
会場 高志中学校  
講師 福井県立大学地域経済研究所 所長 南保 勝 氏  
テーマ 福井の産業  
参加者 2名

#### 高志高校SGH(2年生) 課題解決型授業の視察

日時 平成30年6月5日(火)、6月19日(火)  
会場 高志高校  
テーマ 仮説設定のアドバイス  
参加者 6名

#### 第9回企画部会

日時 平成30年7月10日(火)  
会場 織協ビル501号室  
テーマ 第1回若手教員と産業界との交流会  
グループディスカッション等  
参加者 教員11名、教育庁・教育研究所8名、当会14名

高志中学(高志学)リレー講座視察

日 時 平成30年7月12日(木)  
会 場 高志中学校  
講 師 サカイオーベックス株式会社 室坂 浩一 氏  
増永眼鏡株式会社 増永 宗大郎 氏  
参加者 2名

第10回企画部会

日 時 平成30年8月22日(水)  
会 場 東工シャッター株式会社  
テーマ 第2回若手教員と産業界との交流会(若大海)  
内 容 工場見学、佐々木社長による講話、グループディスカッション等  
参加者 教員11名、教育庁・教育研究所8名、当会14名

高志高校SGH(1年生)グローバル探究授業の視察

日 時 平成30年9月14日(金)  
会 場 高志高校  
講 師 株式会社田中化学研究所 田中 孝明 氏  
参加者 2名

若手教員と産業界との交流会(若大海) ヒアリング

日 時 平成30年9月18日、19日、20日  
会 場 大野高校、三国高校、福井農林高校、教育研究所  
テーマ 今後の運営についての意見聴取  
参加者 4名

高志高校SGH(1年生)グローバル探究授業の視察

日 時 平成30年9月21日(金)  
会 場 高志高校  
講 師 東工シャッター株式会社 北川 章仁 氏  
参加者 2名

第11回企画部会

日 時 平成30年10月22日(月)  
会 場 織協ビル802号室  
テーマ 第3回若手教員と産業界との交流会(若大海)  
講 師 福井大学産学官連携本部 准教授 竹本 拓治 氏  
演題 地域産業界と協働したキャリアとアントレプレナーシップの教育の可

能性  
参加者 教員11名、教育庁・教育研究所9名、当会12名

大野高校課題解決型授業の視察

日 時 平成30年11月5日(月)  
会 場 大野高校  
テーマ 課題解決型授業へのアドバイス  
参加者 5名

新山直広氏への講演依頼

日 時 平成30年12月3日(月)  
参加者 2名

高志高校SGH 中間発表会視察

日 時 平成30年12月4日(火)11日(火)  
テーマ 課題取組中間発表  
参加者 5名

高志中学(高志学)リレー講座視察

日 時 平成30年12月6日(木)  
会 場 高志中学校  
講 師 株式会社日本ピーエス 有馬 浩史 氏  
酒井化学工業株式会社 酒井 清章 氏  
参加者 2名

高志高校SGH 中間発表会視察

日 時 平成30年12月11日(火)  
テーマ 課題取組中間発表  
参加者 4名

若手教員との交流会(三国高校グループへの助言訪問)

日 時 平成30年12月12日(水)  
会 場 三国高校  
テーマ 「地方創生」に関する授業教材作り  
参加者 3名

高志中学校(高志学)職場体験発表会視察

日 時 平成30年12月14日(金)

会 場 高志中学  
テーマ 職場体験学習の成果発表と企業の情報交換会  
参加者 3名

#### 大野高校課題解決型授業の視察

日 時 平成30年12月19日(水)  
会 場 大野高校  
テーマ 課題解決型授業最終発表会へのアドバイス  
参加者 3名

#### 役員打合せ会

日 時 平成30年12月19日(水)  
会 場 事務局  
テーマ 提言書(報告書)について  
参加者 5名

#### 高志中学(高志学)リレー講座視察

日 時 平成31年1月10日(木)  
会 場 高志中学  
講 師 株式会社エイチアンドケー 篠田 秀幸 氏  
福井県民生活協同組合 檜原 弘樹 氏  
参加者 2名

#### 打合せ会

日 時 平成31年1月16日(水)  
会 場 福井大学  
テーマ 提言書(報告書)について  
参加者 4名

#### 第12回企画部会

日 時 平成31年1月16日(水)  
会 場 織協ビル802号室  
テーマ 第4回若手教員と産業界との交流会(若大海)  
内 容 新山氏の講話、グループディスカッションなど  
講 師 TSUGI Ilc. (合同会社)代表 新山 直広 氏  
演 題 ものづくり・人づくり・まちづくり  
参加者 教員10名、教育庁・教育研究所9名、当会14名

福井県教育研究所との「報告書」に関する情報交換

日 時 2019年2月26日(火)  
会 場 福井県教育総合研究所  
参加者 3名

提言打合せ会

日 時 2019年3月11日(月)  
会 場 株式会社田中地質コンサルタント  
参加者 5名

高志中学(高志学)リレー講座視察

日 時 2019年3月14日(木)  
会 場 高志中学  
講 師 株式会社福井新聞社 藪内 弘昌 氏  
福井コンピュータアーキテクト 佐藤 浩一 氏  
参加者 2名

高志高校SGH1年生研究発表会

日 時 2019年3月15日(木)  
会 場 高志高校  
参加者 3名

福井大学ジュニアドクター評価委員

日 時 2019年3月17日(日)  
会 場 福井大学  
参加者 1名

第13回企画委員会

日 時 2019年3月19日(火)  
会 場 織協ビル802号室  
テーマ 提言書の検討  
参加者 9名

**<福井経済同友会 人づくり委員会>**

(敬称略)

職 名	氏 名	企 業 名	役 職
委員長	佐々木 知也	東工シャッター株式会社	代表取締役社長
部会長	小林 秀夫	第一ビニール株式会社	代表取締役社長
副部会長	田中 謙次	株式会社田中地質コンサルタント	代表取締役社長
総括幹事	田中 陽介	株式会社タッセイ	代表取締役副社長
企画幹事	荒木 宏信	ユアサ株式会社	代表取締役
企画幹事	伊井 彌州雄	有限会社伊井興業	代表取締役社長
企画幹事	石丸 敦士	ブルデンシャル生命保険株式会社	エグゼクティブ・ ライフプランナー
企画幹事	加藤 誠	オリックス株式会社福井支店	支店長
企画幹事	小玉 隆一	アズワンコンサルティング株式会社	代表取締役・社労士
企画幹事	齊藤 泰輔	石黒建設株式会社	代表取締役社長
企画幹事	白江 文夫	セコム北陸株式会社福井統轄支社	統轄支社長
企画幹事	佃 祥孝	中部鋳業株式会社	代表取締役
企画幹事	出口 淳	株式会社エクシート	専務取締役
企画幹事	中田 善弘	株式会社キャリアプラス	代表取締役
企画幹事	松原 淑裕	あわら観光株式会社	代表取締役社長
企画幹事	中道 正康	ネットヨタ福井株式会社	代表取締役社長
事務局	東山 清和	福井経済同友会	専務理事 事務局長
事務局	坂下 佳弘	福井経済同友会	事務局次長
アドバイザー	竹本 拓治	福井大学産学官連携本部	教授

2019.04現在